茨木市立　　春日丘小学校　全国学力・学習状況調査分析結果

令和４年 10 月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

（領域ごと）

①　（1）言葉の特徴や使い方に関する事項	良好な結果であった
（3）我が国の言語文化に関する事項	概ね良好な結果であった
②A話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
③B書くこと	概ね良好な結果であった
④C読むこと	良好な結果であった

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	大変良好な結果であった
③記述式	良好な結果であった

（無解答率）	概ね良好な結果であった

（その他）

○最も正答率が低かった設問　:3（2）
　文章に対する感想や意見を伝えあい、自分の文章のよいところを見つける設問
　【領域:B 書くこと　問題形式:記述式】
○無解答率が高かった設問　：　3（2）
　※同上

分析

14ある設問のうち、11の設問が全国の正答率を上回っていた。領域別にみると、「読むこと」と、「言葉の特徴や使い方に関する事項」のほぼ全てが全国平均を上回っていた。一方、正答率が低かった領域は「書くこと」で問題形式は記述式であった。3（2）の文章に対する感想や意見を伝えあい、自分の文章のよいところを見つける設問は、全国平均よりは正答率は上回っているものの、無解答率が約15%と記述式の問題に苦手意識があることが読み取れる。既定の文章から言葉や文を取り上げたり、字数制限の中で自分の考えをまとめたりすることが課題としてみられた。資料を読み取り要約をしながら、三つの条件に合わせて文を書く力も求められている設問でもある。三つの条件を満たすことができていない児童が多く、その例としては、①決められた文字数で書いていない。②資料から言葉や文を取り上げて書いていないなどであった。日々の授業の中で、児童が文章を正しく的確に読んで要約する力や、条件をつけて文章を書く練習などの指導をしていく必要がある。対策としては、①短文づくり、②リーディングスキル、③資料を読む訓練、④条件つき文の練習である。

○●算数●○

（領域ごと）

①A数と計算　　概ね良好な結果であった

②B図形　　大変良好な結果であった

③C変化と関係　　概ね良好な結果であった

④Dデータの活用　　良好な結果であった

（問題形式）

①選択式　　良好な結果であった

②短答式　　良好な結果であった

③記述式　　良好な結果であった

（無解答率）　　概ね良好な結果であった

（その他）

○最も正答率が低かった設問　：2（3）
荷重が含まれている飲み物の量に半分にしたときの、荷重の割合について正しいものを選ぶ
→示された場面のように、数量が変わっても割合は変わらないことを理解している
【領域：D 変化と関係　　問題形式：選択式】

○無解答率が高かった設問　：1（3）、3（4）
1（3）・・・カップケーキ7個分の値段を、1470÷3で求められることができるわけを書く
→示された場面を解釈し、除法で求めることができる理由を記述できる
【領域：A 数と計算　　問題形式：記述式】
3（4）・・・1年生の希望をよりかなえるためのポイント数の求め方と答えを書く
→加法と乗法の混合したポイント数n求め方を解釈し。ほかの場合のポイント数の求め方と答えを記述できる
【領域：A数と計算　　問題形式：記述式】

分析

16ある設問のうち、15の設問が全国平均の正答率を上回っていた。「図形」の領域は、全国平均よりもすべて高い正答率であった。図形を構成する要素に着目して、それぞれの図形の意味や性質、構成の仕方についての力が付いていると言える。正答率の低かった設問は「変化と関係」の領域で数量が変わっても割合は変わらないことを答える問題である。正解できなかった児童の回答の大半は、「飲み物の量が2分の1になると、果汁の割合も2分の1になる」であった。割合の仕組みについて理解し、もとの量が変わっても割合は変わらないことを普段の生活の場面等と結び付けて考える力を身につけなければならないことがわかる。また、正答率は低くないものの無解答率の高かった1（3）、3（4）はどちらも記述式の問題であった。普段から、問題を解くのみに限らず、考え方を説明する力を身に着けなければならないことがわかる。さらに、1問のなかにたくさん情報があるので、必要な情報を探し出し、自分の考えを整理して書く力をつけさせたい。　算数の設問に関しては、1年生から6年生までの様々な学習の要素を含んでいることから、日々授業を行う際には、学年をさかのぼって繰り返し学習に取り組むことも大切である。

○●理科●○

（区分）

①エネルギー　　良好な結果であった

②粒子　　良好な結果であった

③生命　　概ね良好な結果であった

④地球　　良好な結果であった

（問題形式）

①選択式　　概ね良好な結果であった

②短答式　　良好な結果であった

③記述式　　良好な結果であった

（無解答率）　　概ね良好な結果であった

（その他）

○最も正答率が低かった設問　：3（1）
光の性質を基に、鏡を捜査して、指定された的に反射させた日光を当てることができる人を選ぶ
→日光は直進していることを理解している
【領域：エネルギー　　問題形式：選択式】

○無解答率が高かった設問　：3（4）
問題に対するまとめから、その根拠を実験の結果を基にして書く
→実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し自分の考えを持ち、その内容を記述できる
【領域：エネルギー　　問題形式：記述式】

分析

17 ある設問のうち、14 の設問が全国平均の正答率を上回っていた。「粒子」「地球」を柱とする領域においては、すべての設問が全国平均の正答率を上回っていた。

正答率の低かった設問は3（1）の「エネルギー」を柱とする領域で、日光は直進することを理解しているかどうかをみる問題である。正解できなかった児童の回答の大半は、三角形に切り抜いた段ボールの前に立つ子どもを正答とするものであった。普段の授業で、実験の趣旨を理解し、様々な条件の下、実験を行い、考察していく中で日光が直進するきまりに気付くことができるような力を養う必要があると言える。

領域別では、すべてが全国平均を上回る結果であった。特に、A 区分「粒子」を柱とする領域の正答率は全国平均よりも大きく上回る結果となった。この結果から、普段の授業において、器具の名称や扱い方を理解した上で実験してきたと言える。

また、正答率は全国を上回るものの無解答率の高かった3（4）は記述式の問題であった。この設問では、実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できるかどうかをみる問題であった。きまりや法則といった知識の面のみ理解するのではなく、仮説を立てて主体的に実験を行い、実験で得られた結果から何が言えるのか、自分なりの言葉でまとめていく必要があるといえる。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

全体的には、国語、算数ともに全国平均を上回っている。しかし、教科別の平均正答率を見ると、国語は令和3年度の結果より約5%程度上がっている。一方で算数は約3%下がっていることがわかる。

国語においては、来年度も平均正答率を維持できるように今年度の取組みを継続する。また、算数においては、どのような問題につまずいているのか課題を見つけて、今後取り組んでいく必要がある。

学力高位層と学力低位層

エンパワー層についての分析

前年度と比較をすると、全体的に学力高位層の割合が上がり、学力低位層の割合も減っている。どの教科においても、高位層・低位層の割合があがり、中位層の割合が下がっている。課題を明確にし、低位層を中位層、高位層へと押し上げていけるよう学校全体で取組みをすすめていく。

○●取組み●○

◎学力向上に関する取組み

今年度の学校研究テーマは「自信を持って、自分の思いを表現する力の育成　～互いに認め合う集団をめざして～」である。研究教科は国語で、「読むこと（説明文の自力読みに向けて）」をテーマに研究を進めている。そのために、学力向上部会では、研修会や研究授業を行っている。また、校内自主研修会や、学年学級を越えて授業を見せ合う期間を設けるなど、教職員が互いにレベルアップできるよう、創意工夫している。また6年生が今年度実施した全国学力・学習状況調査の結果分析をもとに、本校の児童につけさせたい力を学校全体で把握し、系統立てて取り組む計画、実践を行っていく予定である。今回の結果では、記述形式で回答する設問に対しての無解答率が高い傾向にあった。自分の考えや実験の結果などから分かったことを書き表すことに抵抗感がある児童が多いとみられる。そこで各教科において言語活動を取り入れ、書くことに対する抵抗を減らすような対策が必要だと考える。対策を講じることにより、書くことに対する児童の自尊感情を高め、主体的に自分の思いなどを書き表すようになることを目指していきたい。具体的な方法は以下の通りである。各教科の授業終わりにふりかえりを書くなど、5分といった短時間であっても継続的に自分の思いを書く時間を設けていく。その際、単に書かせるのではなく文章のまとめ方や言葉の使い方などを学年に応じて指導したり、書き上げたものを教師が添削指導したりしていく。また、1～4年生まではモジュールの時間等を活用し、課題克服に向けた活動を行う。モジュールで行う場合の学習内容の例としては、月曜日・・短文（条件つき）、水曜日・・リーディングスキル、木曜日・・新出漢字、金曜日・・全校読書である。5・6年生については、各教科での授業の中で、書く活動をより意識して行う。学期に一回、木曜日の6限目を活用して、全教職員で分担し、全国学力学習状況調査の問題を参考に記述の仕方について少人数で学習する機会を設定する。また算数などでは、単純な計算だけでなく、文章問題の意味を理解し、図に表現するなどの活動を学校全体で取り組んでいく。

◎人権教育に関する取組み

今年度の人権教育部会の研究テーマは「平和学習」で、「ひととつながり、ともに学ぶ、個を生かし互いに認め合う集団づくり」である。児童が安心して自分を表現できる学級、学校をつくるため、教師自身が人権感覚を養い、児童の小さなサインや変化を見逃さないよう努めていく。何事にも意欲を持って取り組める児童や、学びを深めることができる学級づくりが学力の向上にもつながると考える。そのため、校内研修会などを通して、学習のテーマを自分事として捉えさせることができる授業展開を研究していく。

◎支援教育に関する取組み

支援教育部会を中心に、個に応じた指導・支援の工夫を行っている。児童に寄り添い、一人ひとりの課題に応じた適切な支援を行うことを目指している。また、スクールサポーター3名を中心に支援学級担任と学級担任が連携・協力をし、配慮が必要な児童や、学校生活に不安がある児童のケアを行っている。

◎中学校ブロックでの保幼小中連携の取組み

週に一度、中学校の外国語教員が高学年の授業に入り、授業などでの児童観察や教材研究、教員の指導力向上に取り組んでいる。児童にとっても、進学先の先生であるという安心感を持つことができ、中1プロブレム解消の一助となっている。また就学前の園児の観察や、中学進学に向けての児童観察など、連携・協力をして、校区全体が一つになって子どもたちを育てていく体制をとっている。コロナ禍で活動が制限される中であっても、可能な限り保幼小中連携、地域との連携も深め、児童同士のつながりを育て、地域ともつながりながら教育活動を行っていく。

「自信を持って、自分の思いを表現する力の育成～互いに認め合える集団をめざして～」の目標を達成するためには、児童にとって、安心して学べる教室が不可欠である。また前述した通り、各教科において自分の思いを書き表すことも大切である。学校全体の共通理解のもと、短時間であっても書く力を高める取組みを行っていき、児童の書くことに対する抵抗感や苦手意識を克服し、自信を持って自分の思いを表現できるよう指導していく。そのためには学級づくりも重要になってくる。今後も、学力向上と人権教育、支援教育それぞれの立場で児童の学力向上と児童の人格形成に、教職員一同が尽力していく。